

## 患者と家族に寄り添う看護

今から3年前、祖父ががんで亡くなった。祖父の死が私にとって初めての身内の死であった。祖父はがんを患い、入退院を繰り返していたが、ついに全身にがんがおよんだ。延命治療を望まなかった祖父は病院ではなく自宅で過ごすことになった。しかし、介護のこと、薬のことなど何をどうすれば良いのかが分からずに困惑していた。そんな中、出会ったのが訪問看護師であった。祖父を担当して下さった看護師はいつも笑顔で祖父や私たちに接してくれた。祖父に口腔ケアや全身清拭、時には組み立て式の浴槽を用いた入浴介助を行ったりもしていた。祖父は気持ちよさそうな表情を浮かべていた。看護師が帰る際、祖父は「ありがとう」といい、看護師と握手を交わしていた。きっと祖父とその看護師の間には強い信頼関係が築かれていたのであろう。また、何も分からない私たちにオムツ交換や体位変換の方法などを丁寧に教えて下さった。それまで私は看護師＝病院というイメージが強く、注射や点滴をしている様子しか思い浮かばなかった。患者の自宅へ看護師自ら足を運び、看護を提供する姿を初めて見て、非常に驚いた。家にいながら病院と同じ看護を受けることができるのは素晴らしいと感じた。

訪問看護を利用して3か月が経った頃、祖父の身体は日々弱っていた。ご飯を食べることや会話をすることも難しくなり、容態が変わっていく祖父をみるのが怖かった。骨が見えるまで身体は痩せ細っていた。私たちは見守ることしかできないのか。強い罪悪感に苛まれた。祖父の身体には点滴など多くの管が通るようになり、痛々しい姿になっていた。そして、ついに呼吸にも変化がみられるようになった。口をすぼめて呼吸をするようになり、呼気と吸気との間が少しずつ長くなっていった。

私は祖父がもうすぐ死んでしまうという悲しい気持ちでいっぱいになり泣き崩れてしまった。そんな中、その看護師は私に「おじいちゃんの耳は最後まではっきり聞こえるの。だからおじいちゃんに話しかけてあげて」と私に言った。ようやく私は祖父の手を握り話かけることができた。「おじいちゃん、育ててくれてありがとう」「遊んでくれてありがとう」「また会おうね」お別れの言葉を言ったとたん、祖父は涙を流して息を引き取った。私にとって忘れられない看取りとなった。

命を救うことだけが看護ではない。その人らしい生き方を尊重し、その人に合わせた援助をすること、患者の死を家族が看取ることができるよう支えることも看護師の重要な役割である。もし、その看護師がいなければ私はずっと泣き続けたまま、きちんとしたお別れができなかったかもしれない。私はその看護師に感謝している。今でもありがとうという気持ちでいっぱいである。私は祖父を担当していただいた看護師のような患者や家族思いの看護師を目指している。人の誕生から最期まで携われる立派な看護師になりたい。